


# 令和6年産「おいでまい」栽培のしおり(西讃)

「おいでまい」の品種特性にあわせた栽培管理を行い、高品質・良食味米生産に努めましょう！  
 ~目標：外観品質1等、タンパク質含有率6.5%以下~

香川県農業協同組合  
 監修 香川県

生育相	活着時期		茎が増える時期		茎の増加を抑える時期		穂ができる時期		穂が大きくなる時期		穂に実が入る時期	
作業の目安	基準	田植日 (播種日)	間断灌水開始 (田植 15日後頃)	中干し開始	中干し終了 (出穂 30日前頃)	穂肥Ⅰ施用 (出穂 18日前)	穂肥Ⅱ施用 (出穂 10日前)	出穂期	収穫期			
		6月20日 (5月31日播種)	7月5日	7月20日	7月30日	8月11日	8月19日	8月29日	10月 5日~10日			
		6月25日 (6月5日播種)	7月10日	7月23日	8月1日	8月13日	8月21日	8月31日	10月 8日~13日			
		6月30日 (6月10日播種)	7月15日	7月25日	8月3日	8月15日	8月23日	9月2日	10月11日~16日			
	※播種、田植は田植適期マップに基づいて行いましょう。 ※この栽培の目安は、農業試験場での生育状態に基づいていますので、地域の気象状況によって変動することがあります。											
	田植え時の状態			中干し開始時の状態		出穂 18日前の状態 (穂肥Ⅰ施用時)		出穂期の状態		成熟期の状態		
	苗丈 15cm まで			草丈 40cm 程度	草丈 75cm		葉色板 4.0		稈長 77cm	穂長 19cm		
	葉齢 2.5葉まで			茎数 30本/株	葉色板 4.0				穂数 22本/株	葉色板 2.5		
	株間 18~22cm			干す程度は亀裂幅1cm以内								
	植付本数 3~4本/株											

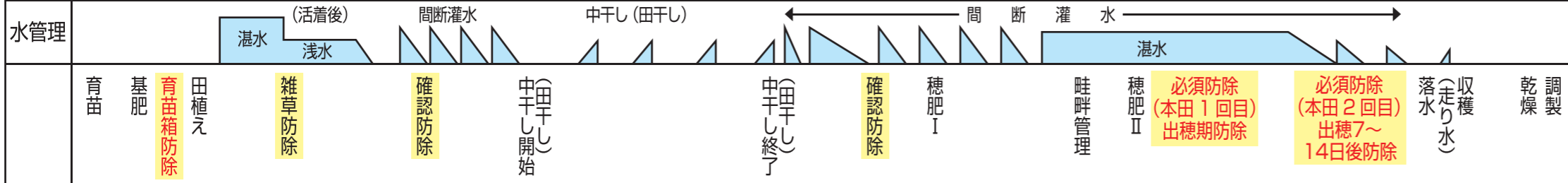
病害虫の発生状況については最新の香川県病害虫防除所のホームページをご覧ください。➡



病害虫防除所HP 病害虫写真館

## 「おいでまい」の特徴と栽培上の留意点

- 地力の低下は、収量や品質の低下を招くので、稲わら・麦わらは焼却せずにすき込み、併せて土壌改良資材を施用しましょう。
- 分けつが旺盛なため、植付本数が多いと過繁茂(初数過多)になり易いので、1株当たりの植付本数は3~4本にしましょう。
- 生育初期は葉色がうすめに推移するので、過度の施肥はしないようにしましょう。
- 強い水管理(干しすぎ・溜めすぎ)は、根を傷めて収量・品質を落とすので、適切な水管理を行いましょう。
- いもち病・紋枯病に弱いので、育苗箱防除、本田防除は必ず実施し、発生が見られたら確認防除を行いましょう。



## 栽培管理のポイント

**育苗**

健康づくりに努める。(水稻育苗のしおりに準じる。)

土壌改良資材も施用する。

育苗箱処理剤を施用する。(必須防除)

**田植え**

1株3~4本植えを基準とする。

株間は18~22cmを基準とする。

**雑草防除**

初期除草剤散布後7日間は止水し、湛水を保つ。

**確認防除**

(特にいもち病常発地)

葉いもちに注意し、発生を確認したら早めに防除をする。

(ガス湧き注意)

間断湛水を行い根ぐされの防止に努める。

**中干し開始**

田面の亀裂幅が1cm程度になったら走り水を行う。

程度は小さなヒビ割れができるまでにとどめる。

1株茎数30本程度で中干し(田干し)を開始し、

**中干し終了**

間断湛水を再開する。

出穂30日前頃には中干し(田干し)を終了し、

**確認防除**

コブノメイガや紋枯病の発生状況に注意する。

**穂肥Ⅰ**

※水稻の生育状況を確認して、施用量を加減する。

出穂18日前(幼穂長5mm程度)に穂肥Ⅰを施用する。

**畦畔管理**

速効性肥料体系の場合、出穂10日前に穂肥Ⅱを施用する。

10日前までに行う。

カメムシ対策として畦畔等の草刈は出穂の

**穂肥Ⅱ**

※水和剤の場合は出穂期〜穂前期に散布する。

※粒剤の場合は出穂5~10日前に散布する。

**必須防除(本田1回目)**

出穂期防除

**必須防除(本田2回目)**

出穂7~14日後防除

**落水(走り水)**

収穫後は速やかに乾燥に移す。

初黄変率85~90%のときに収穫する。

落水後も乾き過ぎる場合は走り水をする。

落水は収穫作業に支障のない限り遅らせる。

クサネムは収穫前までに抜き取る。

カメムシ類

紋枯病・穂いもち

**乾燥**

篩目1.85mm以上のライスグレーダーで調製する。

仕上がり水分14.5~15.0%とする。

「おいでまい」の施肥基準(側条施肥) 土壌改良資材、たい肥等の施用基準は地域の令和6年産 水稻栽培のしおりの「ヒノヒカリ」に準じます。

ほ場毎の栽培履歴や地力等に応じて施肥量は増減して下さい。

速効性肥料の場合 (kg/10a)					ツースョット肥料の場合 (kg/10a)				ワンショット肥料の場合 (kg/10a)				
肥料名	合計	基肥	穂肥Ⅰ (出穂18日前)	穂肥Ⅱ (出穂10日前)	肥料名	合計	基肥	穂肥Ⅰ (出穂18日前)	窒素成分	肥料名	合計	基肥	窒素成分
朝日BB488	60	35	15	10	中生ふたふり	50	30	20	7.5	おいでまい一発	40	40	7.2
ユーキ鉄ケイカルまたはシリカサポート1号	100	100	—	—	ユーキ鉄ケイカルまたはシリカサポート1号	100	100	—	—	ユーキ鉄ケイカルまたはシリカサポート1号	100	100	—
苦土一番または珪酸加里	40	基肥、追肥(出穂30~40日前)いずれの施用でも良い。			苦土一番または珪酸加里	40	基肥、追肥(出穂30~40日前)いずれの施用でも良い。			苦土一番または珪酸加里	40	基肥、追肥(出穂30~40日前)いずれの施用でも良い。	

※手散布等側条施肥でない場合は、基肥量を2割程度増肥する。 ※手散布等側条施肥でない場合は、基肥量を2割程度増肥する。 ※手散布等側条施肥でない場合は、基肥量を2割程度増肥する。 ※穂肥量は天候や地力に応じて加減する。

### 穂肥診断基準(出穂20日前)

草丈	葉色板	穂肥Ⅰ施用量
75cm 未満	4.5 未満	基準量
	4.5 以上	基準の半量
	5.0 以上	施用しない
75~85cm	4.0 未満	基準量
	4.0 以上	基準の半量
	4.5 以上	施用しない
85cm 以上		施用しない

### 病害虫防除基準

**【必須防除】育苗箱防除**

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用量	使用回数	回数	注意事項
田植前	いもち病・紋枯病 ツマクロコバエ コブノメイガ	ピルダール フルテラチエス GT粒剤	50g/箱	移穂3日前~ 移穂当日	1回	主として中山間部~平田部で使用。但しいもち病の発生が少なく、フタオビコバヤツマクロコバエが多い場合はエバーゴルプラス粒剤を使用した方が良い。
田植後	いもち病・紋枯病 フタオビコバヤツマクロコバエ コブノメイガ ツマクロコバエ ウツカカメムシ イネノミドリムシ イネノオオムシ 白葉枯病	エバーゴルプラス 粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~ 移穂当日	1回	主として平田部~海沿い地域で使用。但し、稲葉枯病の発生が多い地域は、ピルダールフルテラチエスGT粒剤を使用した方が良い。

**【必須防除】本田防除**

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用量	使用回数	回数	注意事項
1回目	いもち病・紋枯病 ツマクロコバエ コブノメイガ カメムシ類 ウツカカメムシ イネノミドリムシ ツマクロコバエ	ゴウケツモンスター 粒剤	3kg	出穂20~15日前 (収穫45日前)	1回	3cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後少なくとも1週間以上は落水やかけ流しはしない。
2回目	いもち病・紋枯病 葉巻穂病 穂枯れ ウツカカメムシ類	ワイドベンチつぶ	250g	出穂14~10日前後	1回	3cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後少なくとも1週間以上は落水やかけ流しはしない。
2回目	いもち病・紋枯病	ダブルカットバリア フロアブル	1000倍 (水150ℓ)	出穂期~穂前期 (穂前期まで)	2回以内	殺菌剤・殺虫剤の混合で使用。ていしんに散布し、隣接ほ場に飛散しないように注意。
2回目	ツマクロコバエ イネノミドリムシ ツマクロコバエ	エミリアフロアブル	1000倍 (水150ℓ)	収穫7日前まで	2回以内	
3回目	いもち病・紋枯病 ツマクロコバエ	スタークル粒剤 スタークル 液剤10 スタークルつぶ	3kg 1000倍 (水150ℓ) 250g	出穂7~14日後 (収穫7日前まで)	3回以内	粒剤、つぶつぶ剤は3cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後少なくとも1週間以上は落水やかけ流しはしない。スタークル液剤は混合剤を含めて3回以内の使用回数とする。

**【確認防除】**

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用量	使用回数	回数	注意事項
2回以内	いもち病・こま葉枯病・稲こらう病・もみ枯病 細菌病・内臓細菌病	ブラシソフロアブル	1000倍	収穫7日前まで	2回以内	発生前後に治療剤として散布する。
2回以内	紋枯病・稲こらう病	モンガリット粒剤	3~4kg	収穫45日前まで	2回以内	施用は、3cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後は少なくとも1週間以上は落水やかけ流しはしない。紋枯病が穂直進期に入る出穂期直前に隣の散布では効果が低下する。
3回以内	ツマクロコバエ イネノミドリムシ イネノオオムシ ツマクロコバエ イネノミドリムシ コブノメイガ	トレボンEW	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	薬に対して長期毒性があるため、近くに農産物がある場合は特に注意し、からさないようにすること。ミツバチ等の巣箱及びその周辺に飛散するおそれがある場合には使用しないこと。

### 雑草防除基準

区分	使用時期	対象雑草名	除草剤名	使用量	回数	注意事項
初期除草	移穂直後~11日	水田一年生雑草 マツバ・ホタルイ ミヤガサノコ カクノコ オモダカ シロシロ セリ アサギ アサギ	カチボシ フロアブル	500ml	1回	ノビエ2.5葉期まで、散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。砂質土壌、湛水田、軟弱田、極端な浅植え、浮き苗が多い水田は使用を避ける。
	移穂直後~7日	水田一年生雑草 マツバ・ホタルイ ウリカク ミズカヤツリ	カチボシ ジャンボ	30g×10個	1回	ノビエ2.5葉期まで、散布後3~4日間は水深5~6cmを保つ。湛水して畦畔から小包装のまま10aあたり10個の割合で均等に投げ入れる。
中耕除草	移穂時または移穂直後~9日	水田一年生雑草 マツバ・ホタルイ ヘラオモダカ カクノコ シロシロ セリ アサギ アサギ	ジェインソル 1キロ粒剤	1kg	1回	ノビエ2.5葉期まで、移穂時(田間時散布)は、除草剤散布が行われた田圃による処理に代わり、散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。砂質土壌、湛水田、軟弱田、極端な浅植え、浮き苗が多い水田は使用を避ける。
	移穂後14日~ノビエ3.5葉期まで(収穫45日前まで)	水田一年生雑草 コウキヤガラ マツバ・ホタルイ カクノコ シロシロ セリ アサギ アサギ	アトカス ジャンボMX ツリカワ	小包装(パック) 25g×20個 (500g)	1回以内	ノビエ3.5葉期まで、湛水状態で20個/10aを均等に投げ込む。散布後湛水状態で7日間湛水、かけ流しはしない。麦や稲ワラ等残草は拡散を避け、効果不足の原因となる。ホタルイは草丈10cmまで、コウキヤガラは草丈20cmまで。
中耕除草	移穂後20日~(収穫50日前まで)	水田一年生雑草 マツバ・ホタルイ カクノコ シロシロ セリ アサギ アサギ	クインチャー バSM液剤	1000ml	2回以内	ノビエ4.0葉期まで、70~100ℓの水に希釈散布。湛水状態で散布し、3日間(浅水処理は5日間)は水の移動を行わない。使用の際には、農薬剤を加用しない。
	移穂後20日(稲3葉期以降)	ツマクロコバエ イネノミドリムシ イネノオオムシ ツマクロコバエ イネノミドリムシ コブノメイガ	ツイギキ 豆つぶ250	250g	1回	ノビエ4.0葉期まで、散布後、3~4日間は水深3~5cmを保つ。砂質土壌、湛水田、極端な浅植え、浮き苗が多い水田は使用を避ける。
発生始~盛期	移穂後20~30日(収穫60日前まで)	イネ科以外の一年生雑草 マツバ・ホタルイ カクノコ シロシロ セリ アサギ アサギ	バサグラン 粒剤	3~4kg	1回	湛水または、ごく浅く湛水して均一に散布。湛水直後処理とし、散布後2~3日間(浅水処理は5日間)は入水しない。
	発生始~盛期(収穫45日前まで)	雑草 ウキ草類	モグテン粒剤	2~3kg	3回以内	湛水して手まき、または散粒剤で均一に散布。水稲が水没するよう十分な湛水を確保する。散布後3~4日間は湛水を保ち、落水はしない。

農業使用の際は、容器に記載された「農業使用基準」を遵守しましょう。農業散布の際は、周辺ほ場や作物へ飛散しないよう注意を払いましょう。

令和5年10月作成(西讃)